

アポーハの遍充把握

——ディグナーガとクマーリラ——

片 岡 啓

1. アポーハ論における遍充把握

ディグナーガは、語意理解のプロセスを推理と同じだと主張する (PS 5:1)。すなわち、言葉が別個の認識手段であることを否定し、「牛」という語も、煙と同じように、論証因に他ならないと考える。言葉は推理手段なのである。この主張は、語意理解の構造が推理の構造と同じである、ということを含意する。すなわち、煙と火 (非火の排除) に見られる構造が、「牛」という語とそれが直接に指し示す牛 (非牛の排除) にも当てはめて考えられる。

推理とのパラレル構造は、遍充把握についても当てはまるはずである。山に立ち昇る煙から山にある隠れた火を推理する場合、その前提として、「およそ煙のある所には必ず火がある」というように、火のある場所が煙のある場所を遍充しているという遍充関係を予め把握している必要がある。伝統的には遍充把握 (vyāptigraha) と呼ばれるものである。すなわち一般法則の把握である。煙が火に遍充されているように、「牛」は牛に遍充されている。すなわち、「およそ「牛」という語は必ず牛に適用される」となる。「だけ」を使って言い換えるならば、「煙は火のある所にだけある」と同様に、「牛」は牛にだけ適用される」のである。

では、ディグナーガは、遍充把握方法について、どのような立場を取っていたのだろうか、また、どのような立場を取る論者と見なされていたのだろうか。本稿では、クマーリラによるディグナーガ批判を主資料としながら、この問題に取り組む。

2. クマーリラによるディグナーガ批判

ディグナーガのアポーハ論を批判する中で、クマーリラは、アポーハの遍充把握方法に言及する。まず ŚV apoha 73-74 で、アポーハ説においては、肯定的随伴 (anvaya) を遍充把握方法とすることが不可能であることが示される。これにより、

(76)

アポーハの遍充把握 (片岡)

肯定的随伴により遍充関係を確定する道がまず断たれる。したがって残る方法は否定的随伴 (vyatireka) による遍充把握だけとなる。クマーリラは続く ŚV apoha 75 において、否定的随伴単独で遍充関係を把握するのが不可能であることを示す。

また、見られたことがないだけでは、両者 (証因・言葉) が理解させることは成立しえない。というのも、残らず全てについて見られたことがないので、理解させられるものは [何も] 残っていないからである¹⁾。

「火の無い所に煙は無かった」と同様、「牛以外に「牛」は適用されたことがなかった」というのが否定的随伴の内容となる。それは、具体的には、反例の未経験である。すなわち、異類例に証因が見られたことがないことである。例えば、火の無いことが知られている湖などの異類例に証因である煙が見られたことが全くないという「見られたことがないこと」(adarśana) が根拠となる。アポーハに当てはめて考えると、これまで、牛以外に「牛」という語が適用されるのを見たことがないという未経験である。

この未経験を根拠とする否定的随伴説に対してクマーリラは、単に見られなかっただけでは、遍充把握は成立せず、したがって語・証因による推理は成立しないと指摘する (75ab)。なぜだろうか。クマーリラは「[同類例・異類例の] 残らず全てにおいて [語・証因が] 見られたことがないから」(sarvatraiva hy adṛṣṭatvāt) と理由を述べる。その意図するところは次のようなものである。牛以外に「牛」という語が適用されるのをこれまで全く見たことがないというのが「見られたことがない」としてディグナーガの意図するものであった。しかし、否定的随伴だけに依拠するならば、実際には、牛に対しても「牛」という語が適用されるのを見たことがないはずだとクマーリラは指摘する。すなわち、非牛・牛の全てについて語の適用が見られたことがないからだと言ふ (75cd)²⁾。

牛に対して「牛」が適用されるのを経験するという肯定的随伴の道は先行箇所 (73-74) で既に否定されている。したがって、ここでは、否定的随伴のみによって遍充関係を確定しなければならない。しかし、否定的随伴に従う限り、牛に「牛」が適用されるのを経験することはできない。「牛以外に、これまで「牛」が適用されるのを見たことがなかった」と同様、「牛に「牛」が適用されるのを見たことがなかった」というのが、否定的随伴だけに従う場合のあり方となるからである。牛に「牛」が適用されるのを経験する必要があるというならば、肯定的随伴が遍充関係把握に必須であるということをも認めたことになってしまう。

3. ヘンペルのカラスの議論

このクマーリラの議論は、「ヘンペルのカラス」の議論を用いて次のように言い換えることができる。「全てのカラスは黒い」(およそ或るものがカラスであれば、そのものは必ず黒い)という法則を論証するにあたって、世界中の黒以外のものをいちいち指差して「これはカラスではない」「これはカラスではない」という否定的随伴を繰り返し確認したとしても、すなわち、反例の未経験(黒くないのにカラスであるのを見たことがない)がいくら続いたとしても、「全てのカラスは黒い」という法則を導くことはできない。なぜならば、否定的随伴だけに依拠するならば、黒くないものだけでなく黒いものも含めて全てについて「カラス」と呼ばれるのを経験したことがないからである。

このことは、肯定的随伴が存在しないものを例に取れば明らかとなる。「全ての火星人は八本足である」という命題は、肯定的随伴によっては確かめることができない法則である。したがって、否定的随伴によって確かめるしかない。すなわち、「八本足でないものは火星人にはなかった」という否定的随伴をいちいち積み重ねていく方法である。しかし、八本足でないものが火星人でないのをいくら確認しても、つまり、八本足でないのに火星人であるような反例をこれまで見たことがないとしても、だからといって、「全ての火星人は八本足である」と結論することはできない。クマーリラの指摘のように、八本足であるものについても火星人だと経験されたことはないからである。否定的随伴による限り、八本足でないものも八本足であるものもいずれも火星人であることは見られたことがないのである。

この火星人の例は、肯定的随伴がなく否定的随伴だけによって法則を確定すべきアポーハの例と同じである。肯定的な経験を欠いたまま、単なる未経験によって、遍充関係を導くことはできない。クマーリラが指摘するように、「残らず全てにおいて」、すなわち、同類例・異類例のいずれにおいても、語・証因は「見られたことがないから」である。「理解させられるべきものは残らない」(pratyāyamaṇāvaśiṣyate)とクマーリラが言うように、これまで見られなかったというだけでは肯定的な法則は確立されないので、「(火星人は)八本足である」「(「牛」という語は)牛(非牛の排除)を指す」という結論が導かれることはないのである。

4. デイグナーガ自身の言明

デイグナーガは、肯定的随伴を全く認めていない訳ではない。彼は PS 5:34abc において、「牛」が馬等に適用されるのが見られたことがないこと、および、「牛」が一部の牛に適用されるのを見たことに言及する³⁾。しかし、遍充把握に資するのは否定的随伴のみであるというのがデイグナーガの意図するところである。そのことは後続文(自註)から明らかとなる。

ここでは、同類例の全ての上に遍充関係を確定することの不可能が述べられている。同類例は無数にあるからである⁴⁾。したがって、全ての事例に渡って遍充関係を確定するにあたっては、否定的随伴のみに依拠することになる。

続く説明において、デイグナーガは、異類例が無数にあっても、遍充関係を確定することは可能であると主張する⁵⁾。それは、「牛」という語が牛以外に適用されるのが、これまで全く見られたことがないという理由による。恐らく自分だけでなく他人の経験も含めて社会的に、そのような事例は全く見られたことがないので無数の事例を尽くしている、というのがデイグナーガの意図するところであろう。

肯定的随伴が遍充関係把握に資することをデイグナーガが認めていないことは、続く一文からも明らかである。ここでは、肯定的随伴に依拠する場合の過失が指摘される。現実には我々は「木」という言葉から、シンシャパー樹だけでなくパラシャ樹の可能性も含めて理解する。すなわち、シンシャパー樹かもしれないしパラシャ樹かもしれないという疑惑を持つ。しかし、「木」という語がシンシャパー樹に適用されるのを繰り返し肯定的に経験した場合には、「シンシャパー樹か、或いは、パラシャ樹か」等という疑惑ではなく、「シンシャパー樹とパラシャ樹とである」等という確定知(niścaya)があることになってしまう⁶⁾。ここでのデイグナーガの議論は、肯定的随伴が遍充把握に資することの否定を念頭に置いたものであり、それ以外ではありえない。

最後にデイグナーガは「だから、否定的随伴を通してのみ推理がある」と締めくくる⁷⁾。ここで「のみ」(eva)が用いられていることから分かるように、彼は、遍充把握手段として否定的随伴だけを認めているのである。このように、クマールラのデイグナーガ理解である否定的随伴説は、デイグナーガのサンスクリット原典(復元)からも十分に確認できるのである。

5. 結語

「八本足でないものは火星人ではなかった」という事例をいくら確認しても「全ての火星人は八本足である」という法則を導くことはできない。同様に、「牛でないものは「牛」と呼ばれたことがなかった」という否定的随伴をいくら重ねても、すなわち、反例の未経験（牛でないものが「牛」と呼ばれたことがない）がいくら続いたとしても、「全ての「牛」は牛を指す」という遍充関係を習得することはできない。肯定的随伴を認めず、否定的随伴だけに依拠するならば、牛が「牛」と呼ばれることも経験されたことがないはずだからである。クマーリラの議論においてディグナーガは、否定的随伴だけによって遍充関係を確定できるとする論者と見なされている。実際、ディグナーガは、「否定的随伴を通してのみ推理がある」と明言している。ディグナーガは、肯定的随伴が遍充把握に資することは認めていなかったのである。

「或るものが火星人であれば、それは必ず八本足である」という法則において証因となるべき「火星人であるので」という理由は、ディグナーガであれば、同類例が存在しない誤った証因である不共不定因 (asādhāraṇānaikāntika) に分類されるはずである。遍充把握に関しては肯定的随伴の役割を認めなかったディグナーガであるが、にもかかわらず、肯定的随伴の事例は、最低でも一例以上あるべきだと考えていた。これは、不共不定因という例外的なケースを排除するためであったと考えられる⁸⁾。しかし、既に述べたように、肯定的随伴は遍充把握に本質的な役割を果たすことがないというのがディグナーガの一貫した主張である。ディグナーガの体系における肯定的随伴の役割は、不共不定因を削ぎ落とすためのものと考えるのが適切である。

「ヘンペルのカラス」を取り上げる桂 1998: 278 は、「ウッディヨータカラは、肯定的喩例がなくても帰納的論証は成立しようと主張するのであるが、肯定的喩例がなくて、単に否定的喩例だけでは、帰納的論証は成り立たないというディグナーガの立場の方が正しい。それはまた、「ヘンペルのカラス」のパラドックスに対する一つの答えになっているのではないだろうか」と述べて、ディグナーガが肯定的随伴が必須であると考えていたことを強調している。しかし、既に見てきたように、そして、クマーリラのディグナーガ批判からも確認できるように、ディグナーガが強調していたのは、(桂 1998 の用語を用いるならば) むしろ「否定的喩例だけで帰納的論証は成り立つ」という立場である。既に述べたように、ディ

グナーガが肯定的随伴の事例経験が(少なくとも一つは)必要だと考えたのは、遍充関係確立に必要なためではなく、問題となる不共不定因を排除するためである。「単に否定的喩例だけでは、帰納的論証は成り立たない」というのは、まさにクマーリラがディグナーガに向けた批判であって、ディグナーガ自身が積極的に主張した点ではない。「否定的随伴だけから遍充関係が確立される」というのがディグナーガが否定的意味論(アポーハ論)を打ち出した核にあり、その核心をクマーリラは批判しているのである。

またディグナーガは、不共不定因である「所聞性」(*śrāvaṇatva*)は肯定的随伴を持たないが、否定的随伴を持つが故に遍充関係を満たし、放置しておく正しい理由となってしまうと考えていた。このことも、ディグナーガが、遍充関係を確立させるものが否定的随伴であると考えていたことの証左となる。だからディグナーガにとり、不共不定因は別個に(肯定的随伴を持たないという理由で)排除する必要があったのである。しかし彼は、肯定的随伴が遍充関係を確立させると考えていたわけではない。

-
- 1) ŚV apoha, v. 75: na cādarśanamātreṇa tābhyāṃ pratyāyanam bhavet/ sarvatraiva hy adṛṣṭatvāt pratyāyām nāvaśiṣyate// (Cf. 服部 1975: 12)
 - 2) 対応するスチャリタ注は Kataoka 2015: 411(94)–410(95): syād etat. anyavyāvṛttimukhena śabdaliṅgābhyāṃ svārthaḥ pratyāyate, kim atrānvayadarśanena. agorūpebhyo 'śvādibhyo 'vṛttidarśanena vyāvṛtto gośabdo gāṃ gamaiṣyati, liṅgaṃ ca vipakṣād vyāvṛttaṃ sādhyārtham iti na kiṃcid anupapannam ity ata āha—na ceti. kāraṇam āha—sarvatreti. yathā khalv asvādiṣu gośabdo na dṛṣṭa iti tān na pratyāyayati, evaṃ gavy apy adṛṣṭapūrvō na gāṃ gamayet. evaṃ liṅge 'pi prasaṅgo darśayitavya iti. 和訳は片岡 2014: 269, n. 36 : 「【反論】 次のことは可能である。他者の排除を通して言葉と証因とが自らの意味を理解させる。ここに肯定的随伴の経験は不要である。非牛である馬等から—— [そこに「牛」という言葉が] 適用されるのを見ないことで——排除された「牛」という語が牛を理解させるとすればよい。また異類例から排除された証因が、論証対象を [理解させるとすればよい]。したがって不都合は何も無い。【答弁】 以上の故に [クマーリラは] 答えて na ca と。理由を述べる—— sarvatra と。周知のように、馬等に対して「牛」という語は見られたことがないので、それら(馬等)を理解させることはない。同様に、牛に対しても見られたことがないので牛を理解させないことになってしまう。同様に証因についても [論証対象を理解させないことになってしまうという] 帰結が示されるべきである。」
 - 3) PS 5:34abc, Pind 2009: A13.25–26.
 - 4) PSV ad 5:34, Pind 2009: A13.28–14.1.
 - 5) PSV ad 5:34, Pind 2009: A14.1–3.
 - 6) PSV ad 5:34, Pind 2009: A14.4–5.

7) PSV ad 5:34, Pind 2009: A14.6–7: ato vyatirekamukhenaivānumānam.

8) 不共不定因については桂 1998: 263–264, 片岡 2009 を参照.

〈略号〉

PS(V) *Pramāṇasamuccaya(vṛtti)*. For the Apoha chapter (PS(V) 5), see Pind 2009.

ŚV *Ślokavārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa*. Ed. Swāmī Dvārikadāsa Śāstrī. Varanasi: Tara Publications, 1978.

〈参考文献〉

片岡啓 2009 「不共不定因再考——なぜ kevalavyatirekin は asādhāraṇānaikāntika ではないのか? ——」『南アジア古典学』 4: 287–330.

——— 2014 「インド哲学における反証可能性の議論」『南アジア古典学』 9: 259–290.

Kataoka, Kei. 2015. “A Critical Edition of *Kāśikā* ad *Ślokavārttika apoha* vv. 2–94.” 『東洋文化研究所紀要』 167: 466(39)–400(105).

桂紹隆 1998 『インド人の論理学』 中央公論社.

服部正明 1975 「Mīmāṃsāślokavārttika, Apohavāda 章の研究 (下)」『京都大学文学部研究紀要』 15: 1–63.

Pind, Ole Holten. 2009. “Dignāga’s Philosophy of Language: Dignāga on anyāpoha. *Pramāṇasamuccaya V. Texts, Translation, and Annotation.*” PhD diss., Universität Wien.

(本稿執筆にあたり科研費 15H03159 の助成を受けた.)

〈キーワード〉 Dignāga, Kumārila, apoha, vyāpti, vyatireka

(九州大学大学院准教授, 博士 (文学))